

オラドゥール・シュル・グラヌ訪問

春に原野先生からメールが来て、それが旅行のお誘いであるとわかった時はちょっと意外な感じでした。「旅への誘いとはボードレールかいな？」ボードレールと原野先生はあまり結びつかないのです。ロマネスクの寺院訪問はまさしくストライクなんです。

しかし杉山先生の『緑の中の廃墟』、オラドゥール訪問がその目的とあっては、これはこの機会を逃したら、おそらく行かず観ず、知らずで一生を終わるであろうと思い、なぜか行く気まんまんとなり、杉山毅の小説について話のできそうな唯一の同級生（単に私の偏屈な印象に過ぎませんからね！声を掛けなかったひとたちすみません）が頭に浮かび、夏にかけてこの旅行を楽しみに企画を立て、インターネットで宿をとり列車を予約し、職場に休みを申請し、ということに相成りました。

ところが今回の旅行は、出発（私たちは原野一行より1日遅れ）前に台風で関西空港が使えなくなったため、さらに1日遅れて成田発となり、そのため予約していた宿と列車を全部変更しながらの旅行になったのです。

オラドゥールへは私たちはリモージュから路線バスで行くつもりでいたので、9月8日の夜にリモージュの宿に着き、翌朝バス停へ向かって行こうと駅の構内を抜けたところで、原野一行とぼったり遭遇しましたよね。台風だの変更だの私にとっては初めての街ばかりだし、ややこしいことの連続する中で、ここだけは偶然ぴったり合ったということでしょうか。むしろ当初の計画どおりだとすれ違いになっていたはずなので、幸運でした。

さてさて、私たちはバス停に行きましたが、1日遅れたので日曜日になっていた！バス運休日でした。バスの時刻表は、何ヶ月も前にリモージュの観光案内所に問い合わせ送ってもらったのですが、日曜の欄は全くの空白で、私は見落としていたのです。

どうすることもできないので駅前からタクシーでオラドゥールまで行きました。ちなみに1時間くらい当地で待ってもらい、往復で120ユーロくらい。

フランスの田舎の小さな街というか村らしく、日曜の朝はプロカント、不要品持ち寄りの露天市が開かれていました。これは土曜日ではやってなかったでしょう。

そこで開館時間を少し待って記念博物館へ。「殉死者の村」という訳になるのでしょうか、Village de Martyr は、この博物館のエントランスから入って行くのです。

建物に残る焼け焦げの痕や、看板、軽便鉄道の幅の狭いレール、建物跡の中のミシンを観ます。村の人たちのことを考えながら歩きます。

例えば戦争によって原爆を落とされた広島と、この村を、被害者の人数などで比べることはできない。ホロコーストの被害者との村を、広島を比べることはできない。今もどこかで起きている紛争の被害と、もう終わった戦争の被害を比べることもまた、何か違うように思えます。

ただ戦争というものが、多くの人によって「仕事」として従事されるものとなったとき、「敵」の側になった人々に対する、驚くべき無関心。そのことに私は恐ろしさを覚えます。

戦争を終わらせるために原爆は必要だったという考えの中に、広島の人たちの生活に対する関心あるいは配慮は全くなかったでしょう。オラドゥールを襲撃したナチスの兵士たちもまた、「任務」を遂行したに過ぎなかったでしょう。

だから記憶し、機会あるごとに考え、ひとはそのような所業を犯してしまうものだという事に立ち止まる必要があると私は考えます。

ここについては、私は「沈黙」し、思考停止するべきではないかと思うのです。

フランスの街は歴史ある場所ほど、戦争の跡もまた深く留めている所が多いです。

私や学部の同級生たちが最初に訪れたポアティエや、リモージュの前日に泊まったトゥルーズも古くは百年戦争、カタリ派の内戦と深く関わった街で、教会や聖堂もかつては壊されたり、装飾を剥がされたりしているのです。

けれどもその度に修復し、建物を使い続けています。

猫はねこ

鳥はとりであるのに

にんげんは

よいことも悪いことも等身大以上のことをする

おまえ

そのことを頭に入れておいて

大きな眼でよく見よ

にんげんの歴史は

至高の愛と無窮の残虐の物語でありつづける - 北村太郎「ピアノ線の夢」

私は、戦後日本で活動を始めた『荒地』派の北村太郎の詩集を持って旅をしていました。いつも、戦争で亡くなった人々や、失った家族など、死を近くに感じて作品を書き続けていた詩人です。

オラドゥールに行く前の日は、トゥルーズのオギュスタン美術館にある回廊で、庭園を眺めてちょっとうたた寝していました。

そしてオラドゥールの後はブルジュの大司教庭園で、連れとワインの小瓶を開けてバゲットをかじって昼ご飯。ずっといい天気で、私たちは子供の頃に読んだ本の話をしたり、今の生活の話や何かを絶えずしていたような気がします。

大学生の頃のことも、普段はあまり憶い出すこともなく暮らしているのですが、私の連れは杉山先生のことよく覚えていて、本も持ってきていました。

彼女はその本は「先生がくださった」と言っていました。私はそのことも全く忘れていて、たぶん私のいただいた筈の本は、実家のどこかにあるのでしょうか。申し訳ない話です。

彼女の持っていたその本が、私をオラドゥールへ連れて行ってくれたと思います。

佐藤 恵【2018.10.2】